

旅客来たりて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天変・地天・飢饉・疫癘遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に超え、之を悲しまざるの族敢へて一人も無し。然る間、或は利剣即是の文を専らにして西土教主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を待みて東方如来の経を誦し、或は病即消滅不老不死の詞を仰いで法華真実の妙文を崇め、或は七難即滅七福即生の句を信じて百座百講の儀を調へ、有るは秘密真言の教に因って五瓶の水を灑ぎ、有るは坐禅入定の儀を全うして空觀の月を澄まし、若しくは七鬼神の号を書して千門に押し、若しくは五大力の形を図して万戸に懸け、若しくは天神地祇を拜して四角四堺の祭祀を企て、若しくは万民百姓を哀れみて国主国宰の徳政を行なふ。然りと雖も唯肝胆を摧くのみにして弥飢疫に逼り、乞客目に溢れ死人眼に満てり。臥せる屍を觀と為し、並べる戸を橋と作す。觀れば夫二離壁を合はせ、五緯珠を連ぬ。三宝世に在し、百王未だ窮まらざるに、此の世早く衰へ、其の法何ぞ廢れたるや。是何なる禍に依り、是何なる誤りに由るや。

主人の曰く、独り此の事を愁ひて胸臆に憤悱す。客来たりて共に嘆く、屢談話を致さん。夫出家して道に入る者は法に依って仏を期するなり。而るに今神術も協はず、仏威も驗無し。具に当世の体を觀るに、愚かにして後生の疑ひを發こす。然れば則ち円覆を仰いで恨みを呑み、方載に俯して慮りを深くす。情微管を傾け聊経文を披きたるに、世皆正に背き人悉く悪に歸す。故に善神国を捨て、相去り、聖人所を辞して還らず。是を以て魔来たり鬼来たり、災起り難起る。言はずんばあるべからず。恐れずんばあるべからず。

客の曰く、天下の災・国中の難、余独り嘆くのみならず、衆皆悲しめり。今蘭室に入りて初めて芳詞を承るに、神聖去り辞し、災難並び起るとは何れの経に出でたるや。其の証拠を聞かん。

主人の曰く、其の文繁多にして其の証弘博なり。

金光明経に云はく「其の国土に於て此の経有りと雖も未だ嘗て流布せしめず。捨離の心を生じて聴聞せんことを樂はず、亦供養し尊重し讚歎せず。四部の衆、持経の人を見るも、亦復尊重し乃至供養すること能はず。遂に我等及び余の眷属、無量の諸天をして此の甚深の妙法を聞くことを得ず、甘露の味はひに背き正法の流れを失ひて、威光及び勢力有ること無からしむ。悪趣を増長し、人天を損滅して、生死の河に墮ちて涅槃の路に乖かん。世尊、我等四王並びに諸の眷属及び藥叉等、斯くの如き事を見て、

其の国土を捨て、擁護の心無けん。但我等のみ是の王を捨棄するに非ず、必ず無量の国土を守護する諸大善神有らんも皆悉く捨去せん。既に捨離し已はりなば其の国当に種々の災禍有りて国位を喪失すべし。一切の人衆皆善心無く、唯繫縛・殺害・瞋諍のみ有って、互ひに相讒諂して枉げて辜無きに及ばん。疫病流行し、彗星数出で、両の日並び現じ、薄蝕恒無く、黑白の二虹不祥の相を表はし、星流れ地動き、井の内に声を発し、暴雨悪風時節に依らず、常に飢饉に遭ひて苗実成らず、多く他方の怨賊有りて国内を浸掠せば、人民諸の苦悩を受けて、土地として所樂の処有ること無けん」已上。

大集經に云はく「仏法実に隱没せば鬚髮爪皆長く、諸法も亦忘失せん。時に当たって虚空の中に大いなる声ありて地を震ひ、一切皆遍く動ぜんこと猶水上輪の如くならん。城壁破れ落ち下り屋宇悉く扨折し、樹木の根・枝・葉・華葉・菓・藥尽きん。唯淨居天を除きて欲界一切処の七味・三精氣損滅して、余り有ること無けん。解脱の諸の善論時に当たって一切尽きん。生ずる所の華菓の味はひ希少にして亦美からず。諸有の井泉池一切尽く枯涸し、土地悉く鹹鹵し、剝裂して丘澗と成らん。諸山皆焦燃して天竜も雨を降さず。苗稼皆枯れ死し、生ずる者皆死れ尽くして余草更に生ぜず。土を雨らし皆昏闇にして日月も明を現ぜず。四方皆亢旱し、数諸の悪端を現じ、十不善業道・貪瞋癡倍増して、衆生の父母に於ける、之を觀ること獐鹿の如くならん。衆生及び壽命色力威樂減じ、人天の樂を遠離し、皆悉く悪道に墮せん。是くの如き不善業の悪王・悪比丘、我が正法を毀壞し、天人の道を損滅し、諸天善神・王の衆生を悲愍する者、此の濁悪の国を棄て、皆悉く余方に向かはん」已上。

仁王經に云はく「国土乱れん時は先づ鬼神乱る。鬼神乱る、が故に万民乱る。賊来たりて国を劫かし、百姓亡喪し、臣・君・太子・王子・百官共に是非を生ぜん。天地怪異し二十八宿・星道・日月時を失ひ度を失ひ、多く賊の起こること有らん」と。亦云はく「我今五眼をもって明らかに三世を見るに、一切の国王は皆過去の世に五百の仏に侍へしに由って帝王の主と為ることを得たり。是を為て一切の聖人羅漢而も為に彼の国土の中に来生して大利益を作さん。若し王の福尽きん時は一切の聖人皆捨去為ん。若し一切の聖人去らん時は七難必ず起こらん」已上。

藥師經に云はく「若し刹帝利・灌頂王等の災難起こらん時、所謂人衆疾疫の難・他国侵逼の難・自界叛逆の難・星宿变化の難・日月薄蝕の難・非時風雨の難・過時不雨の難あらん」已上。

仁王經に云はく「大王、吾が今化する所の百億の須弥、百億の日月、一々の須弥に四天下有り、其の南閻浮提に十六の大国・五百の中国・十千の小国有り。其の国土の中に七つの畏るべき難有り、一切の国王是を難と為すが故に、云何なるを難と為す。日月

度を失ひ時節返逆し、或は赤日出で、黒日出で、二三四五の日出で、或は日蝕して光無く、或は日輪一重二三四五重輪現ずるを一の難と為すなり。二十八宿度を失ひ、金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・斗星・南斗・北斗・五鎮の大星・一切の国主星・三公星・百官星、是くの如き諸星各々変現するを二の難と為すなり。大火国を焼き万姓焼尽せん、或は鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火あらん。是くの如く変怪するを三の難と為すなり。大水百姓を溺没し、時節返逆して冬雨ふり、夏雪ふり、冬時に雷電霹靂し、六月に氷霜雹を雨らし、赤水・黒水・青水を雨らし、土山・石山を雨らし、沙・礫・石を雨らす。江河逆しまに流れ、山を浮べ石を流す。是くの如く変ずる時を四の難と為すなり。大風万姓を吹き殺し、国土山河樹木一時に滅没し、非時の大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風あらん、是くの如く変ずるを五の難と為すなり。天地国土亢陽し、炎火洞燃として百草亢旱し、五穀登らず、土地赫燃して万姓滅尽せん。是くの如く変ずる時を六の難と為すなり。四方の賊来たりて国を侵し、内外の賊起こり、火賊・水賊・風賊・鬼賊ありて百姓荒乱し、刀兵劫起せん。是くの如く怪する時を七の難と為すなり」と。

大集経に云はく「若し国王有りて、無量世に於て施戒慧を修すとも、我が法の滅せんを見て捨て、擁護せずんば、是くの如く種うる所の無量の善根悉く皆滅失して、其の国当に三つの不祥の事有るべし。一には穀貴、二には兵革、三には疫病なり。一切の善神悉く之を捨離せば、其の王教令すとも人随従せず、常に隣国の為に侵嬖せられん。暴火横に起こり、悪風雨多く、暴水増長して、人民を吹灑せば、内外の親戚其れ共に謀叛せん。其の王久しからずして当に重病に遇ひ、寿終の後大地獄の中に生ずべし。乃至王の如く夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡守・宰官も亦復是くの如くならん」已上。

夫四経の文朗らかなり、万人誰か疑はん。而るに盲瞽の輩、迷惑の人、妄りに邪説を信じて正教を弁へず。故に天下世上諸仏衆経に於て、捨離の心を生じて擁護の志無し。仍って善神聖人国を捨て所を去る。是を以て悪鬼外道災を成し難を致すなり。

客色を作して曰く、後漢の明帝は金人の夢を悟りて白馬の教を得、上宮太子は守屋の逆を誅して寺塔の構へを成す。爾しより来、上一人より下万民に至るまで仏像を崇め経巻を専らにす。然れば則ち叡山・南都・園城・東寺・四海・一州・五畿・七道に、仏経は星のごとく羅なり、堂宇雲のごとく布けり。鷲子の族は則ち鷲頭の月を觀じ、鶴勒の流は亦鷄足の風を伝ふ。誰か一代の教を禰し三宝の跡を廃すと謂はんや。若し其の証有らば委しく其の故を聞かん。

主人諭して曰く、仏閣薨を連ね経蔵軒を並べ、僧は竹葦の如く侶は稻麻に似たり。

崇重そうじゅう年とし旧ふり尊貴そんきひ日に新あらたなり。但たし法師てんごくは諂曲てんごくにして人倫にんりんを迷惑みづかし、王臣わうしんは不覺ふかくにして邪正じゃせいを弁わきまふること無し。

仁王經に云はく「諸の悪比丘多く名利を求め、国王・太子・王子の前に於て自ら破みづか仏法の因縁・破国の因縁を説かん。其の王わきま別ことばへずして此の語よこしまを信聴し、横に法制を作りて仏戒に依らず。是を破仏・破国の因縁と為す」已上。

涅槃經に云はく「菩薩、悪象等に於ては心に恐怖くふすること無かれ。悪知識に於ては怖畏ふいの心を生ぜよ。悪象の為に殺されては三趣さんしゆに至らず、悪友の為に殺されては必ず三趣に至る」已上。

法華經に云はく「悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを為れ得たりと謂ひ、我慢がまんの心充滿せん。或は阿練若あれんにやに納衣のうえにして空閑くうげんに在り、自ら真の道しん どうを行ぎょうずと謂ひて人間きょうせんを輕賤とんじゃくする者有らん。利養りじやうに貪著びやくえするが故に白衣びやくえの与ために法を説いて、世に恭敬くぎやうせらるゝこと六通らかんの羅漢らかんの如ないしにならん。乃至常なに大衆たいしゆの中に在りて我等われらを毀そしらんと欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆ひぼうに向かつて誹謗ひぼうして我が悪を説いて、是邪見これの人外道の論議いを説くと謂はん。濁劫じよくこう悪世の中には多く諸の恐怖くふ有らん。悪鬼あく其の身そのに入めりて我を罵詈めり毀辱きにくせん。濁世じよくせの悪比丘は仏の方便ずいぎ隨宜ずいぎ所説すしの法を知らず、悪口あくくちして鬻ひんじやく聲しばしばひんずいし数々かずかず擯出ひんしゆしせられん」已上。

涅槃經に云はく「我涅槃の後無量百歳に四道の聖人悉く復涅槃せん。正法滅して後像法の中に於て当に比丘有るべし。持律じじゆに似像すこして少しく經を讀誦どくじゆし、飲食おんじきを貪嗜とんしして其の身ちやうようを長養けさし、袈裟けさを著すと雖も、猶獵師なの細視な除行しゆぎやうするが如く猫うかがの鼠うを伺うかがふが如し。常に是の言ことばを唱なへん、我羅漢われらかんを得たりと。外には賢善けんぜんを現じ内には貪嫉とんしつを懷いだく。啞法あほうを受けたる婆羅門等ばらもんの如し。實には沙門しゃもんに非ずして沙門しゃもんの像しじやうを現じ、邪見熾盛しじやうにして正法を誹謗つせん」已上。文に就いて世を見るに誠つに以しかて然しかなり。悪侶あくりふを誡いましめずんば豈善事あにを成さんや。

客猶なおいきど憤めいおうりて曰く、明王めいおうは天地よに因よつて化つまびを成し、聖人は理非つまびを察つまびらかにして世を治む。世上の僧侶は天下の歸する所なり。悪侶に於ては明王信ずべからず、聖人に非ずんば賢哲けんてつ仰けんせいぐべからず。今賢聖の尊重けんせいせるを以て則ち竜象りゆうじやうの輕けいからざることを知んぬ。何ぞ妄言もうげんを吐はきて強あながちに誹謗たればとを成し、誰人たれびとを以て悪比丘あくひくと謂いふや、委細いさいに聞あかんと欲す。

主人の曰く、御鳥羽院ぎやうの御宇ほうねんに法然せんちやくしゆうといふもの有り、選択集せんたくしゆを作る。則ち一代の聖教しやうぎやうを破あまねし遍あまねく十方じふじやうの衆生しゆじやうを迷まはす。其の選択せんたくに云はく「道どう綽じやく禪師ぜんし聖道じしやうどう・淨土じゆんどうの二門にもんを立て、聖道せいどうを捨すて、正まさしく淨土じゆんどうに歸するの文、初めに聖道門せいどうもんとは之これに就あいて二有にり、乃至之これに準まさじて之あを思おふに、応まに密大みやく及および実大じつを存ぞんすべし。然れば則ち今の真言まご・仏心ぶつしん・天台たいがい・華嚴けわげん・三論さんろん・法相ほふけ・地論ちろん・撰論せんろん、此等の八家の意はつ正まさしく此ここに在るなり。

曇鸞法師の往生論の註に云はく、謹んで竜樹菩薩の十住毘婆沙を案ずるに云はく、菩薩阿毘跋致を求むるに二種の道有り、一には難行道、二には易行道なりと、此の中の難行道とは即ち是聖道門なり。易行道とは即ち是淨土門なり。淨土宗の学者先づ須く此の旨を知るべし。設ひ先より聖道門を学ぶ人なりと雖も、若し淨土門に於て其の志有らん者は須く聖道を棄て、淨土に歸すべし」と。又云はく「善導和尚は正・雜の二行を立て、雜行を捨て、正行に歸するの文。第一に読誦雜行とは、上の觀經等の往生淨土の經を除いて已外、大小乘・顯密の諸經に於て受持読誦するを悉く読誦雜行と名づく。第三に禮拜雜行とは、上の彌陀を禮拜するを除いて已外、一切の諸仏菩薩等及び諸の世天等に於て禮拜し恭敬するを悉く禮拜雜行と名づく、私に云はく、此の文を見るに須く雜を捨て、專を修すべし。豈百即百生の專修正行を捨て、堅く千中無一の雜修雜行を執せんや。行者能く之を思量せよ」と。又云はく「貞元入藏録の中に、始め大般若經六百卷より法常住經に終はるまで、顯密の大乗經総じて六百三十七部・二千八百八十三卷なり、皆須く読誦大乘の一句に撰すべし」「当に知るべし、隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も隨自の後には還つて定散の門を閉づ。一たび開いて以後永く閉ぢざるは唯是念仏の一門なり」と。又云はく「念仏の行者必ず三心を具足すべきの文、觀無量壽經に云はく、同經の疏に云はく、問ふて曰く、若し解行の不同邪雜の人等有りて外邪異見の難を防がん。或は行くこと一分二分にして群賊等喚び廻すとは、即ち別解・別行・惡見の人等に喩ふ。私に云はく、又此の中に一切の別解・別行・異学・異見等と言ふは是聖道門を指すなり」已上。又最後結句の文に云はく「夫速やかに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に且く聖道門を闔きて選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲せば、正・雜二行の中に且く諸の雜行を抛ちて選んで應に正行に歸すべし」已上。

之に就いて之を見るに、曇鸞・道綽・善導の謬釈を引いて聖道淨土・難行易行の旨を建て、法華・真言総じて一代の大乗六百三十七部二千八百八十三卷、一切の諸仏菩薩及び諸の世天等を以て、皆聖道・難行・雜行等に撰して、或は捨て、或は閉じ、或は闔き、或は抛つ。此の四字を以て多く一切を迷はし、剩へ三国の聖僧・十方の仏弟を以て皆群賊と号し、併せて罵詈せしむ。近くは所依の淨土の三部經の「唯五逆と誹謗正法を除く」の誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる法華經の第二の「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば、乃至其人命終して阿鼻獄に入らん」の誠文に迷ふ者なり。是に代末代に及び、人聖人に非ず。各冥衢に容りて並びに直道を忘る。悲しいかな瞳瞭を樹たず。痛ましいかな徒に邪信を催す。故に上国王より下土民に至るまで、皆經は淨土三部の外に經無く、仏は彌陀三尊の外に仏無しと謂へり。

仍つて伝教・義真・慈覺・智証等、或は万里の波濤を涉りて渡せし所の聖教、或

は一朝の山川を廻りて崇むる所の仏像、若しくは高山の巔に華界を建て、以て安置し、若しくは深谷の底に蓮宮を起て、以て崇重す。釈迦・薬師の光を並ぶるや、威を現当に施し、虚空・地蔵の化を成すや、益を生後に被らしむ。故に国主は郡郷を寄せて以て灯燭を明らかにし、地頭は田園を充て、以て供養に備ふ。

而るを法然の選択に依って、則ち教主を忘れて西土の仏駄を貴び、付嘱を抛ちて東方の如来を闇き、唯四卷三部の經典を専らにして空しく一代五時の妙典を抛つ。是を以て弥陀の堂に非ざれば皆供仏の志を止め、念佛の者に非ざれば早く施僧の懐ひを忘る。故に仏堂は零落して瓦松の煙老い、僧房は荒廢して庭草の露深し。然りと雖も各護惜の心を捨て、並びに建立の思ひを廢す。是を以て住持の聖僧行きて歸らず、守護の善神去りて來たること無し。是偏に法然の選択に依るなり。悲しいかな数十年の間、百千万の人魔縁に蕩かされて多く仏教に迷へり。謗を好んで正を忘る、善神怒りを成さざらんや。円を捨て、偏を好む、悪鬼便りを得ざらんや。如かず彼の万祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには。

客殊に色を作して曰く、我が本師釈迦文、浄土の三部經を説きたまひてより以来、曇鸞法師は四論の講説を捨て、一向に浄土に歸し、道綽・禪師は涅槃の広業を闇きて偏に西方の行を弘め、善導和尚は雜行を抛ちて専修を立て、慧心僧都は諸經の要文を集めて念佛の一行を宗とす。弥陀を貴重すること誠に以て然なり。又往生の人其れ幾ばくぞや。就中法然聖人は幼少にして天台に昇り、十七にして六十卷に涉り、並びに八宗を究め具に大意を得たり。其の外一切の經論七遍反覆し、章疏伝記究め看ざることなく、智は日月に齊しく徳は先師に越えたり。然りと雖も猶出離の趣に迷ひ涅槃の旨を弁へず。故に遍く觀、悉く鑑み、深く思ひ、遠く慮り、遂に諸經を抛ちて専ら念佛を修す。其の上一夢の靈応を蒙り四裔の親疎に弘む。故に或は勢至の化身と号し、或は善導の再誕と仰ぐ。然れば則ち十方の貴賤頭を低れ、一朝の男女歩みを運ぶ。爾しより來春秋推し移り、星霜相積れり。而るに忝くも釈尊の教へを疎かにして、恣に弥陀の文を譏る。何ぞ近年の災を以て聖代の時に課せ、強ちに先師を毀り、更に聖人を罵るや。毛を吹いて疵を求め、皮を剪りて血を出だす。昔より今に至るまで此くの如き悪言未だ見ず、惶るべく慎むべし。罪業至って重し、科条争でか遁れん。对座猶以て恐れ有り、杖を携へて則ち歸らんと欲す。

主人咲み止めて曰く、辛きを蓼葉に習ひ臭きを溷廁に忘る。善言を聞いて悪言と思ひ、謗者を指して聖人と謂ひ、正師を疑って悪侶に擬す。其の迷ひ誠に深く、其の罪浅からず。事の起こりを聞かんとすれば、委しく其の趣を談ぜん。釈尊説法の内、一代五時の間先後を立て、權実を弁ず。而るに曇鸞・道綽・善導既に權に就いて実を忘れ、先に依って後を捨つ。未だ仏教の淵底を探らざる者なり。就中法然其の流れを酌むと雖

も其の源を知らず。所以は何。大乘經六百三十七部・二千八百八十三卷、並びに一切の諸仏菩薩及び諸の世天等を以て、捨閉閣拋の字を置いて一切衆生の心を薄す。是偏に私曲の詞を展べて全く仏經の説を見ず。妄語の至り、悪口の科、言ひても比無く、責めても余り有り。人皆其の妄語を信じ、悉く彼の選択を責ぶ。故に浄土の三經を崇めて衆經を抛ち、極樂の一仏を仰いで諸仏を忘る。誠に是諸仏諸經の怨敵、聖僧衆人の讎敵なり。此の邪教広く八荒に弘まり周く十方に遍す。抑近年の災を以て往代を難ずるの由強ちに之を恐る。聊先例を引いて汝の迷ひを悟すべし。止觀の第二に史記を引いて云はく「周の末に被髮袒身にして礼度に依らざる者有り」と。弘決の第二に此の文を釈するに、左伝を引いて曰く「初め平王の東遷するや、伊川に被髮の者の野に於て祭るを見る。識者の曰く、百年に及ばざらん。其の礼先ず亡びぬ」と。爰に知んぬ、徵前に顯はれ災ひ後に致ることを。「又阮籍逸才にして蓬頭散帶す。後に公卿の子孫皆之に教ひて、奴苟して相辱しむる者を方に自然に達すといひ、擗節競持する者を呼んで田舎と為す。司馬氏の滅ぶる相と為す」已上。

又慈覺大師の入唐巡礼記を案ずるに云はく「唐の武宗皇帝の會昌元年、勅して章敬寺の鏡霜法師をして諸寺に於て弥陀念仏の教を傳へしむ。寺毎に三日巡輪すること絶えず。同二年回鶻国の軍兵等唐の堺を侵す。同三年河北の節度使忽ち乱を起こす。其の後大蕃国更た命を拒み、回鶻国重ねて地を奪ふ。凡そ兵乱は秦項の代に同じく、災火邑里の際に起こる。何に況んや武宗大いに仏法を破し多く寺塔を滅す。乱を撥むること能はずして遂に以て事有り」已上取意。

此を以て之を惟ふに、法然は後鳥羽院の御宇、建仁年中の者なり。彼の院の御事既に眼前に在り。然れば則ち大唐に例を残し吾が朝に証を顯はす。汝疑ふこと莫れ汝怪しむこと莫れ。唯須く凶を捨て善に歸し源を塞ぎ根を截るべし。

客聊和らぎて曰く、未だ淵底を究めざれども數其の趣を知る。但し華洛より柳營に至るまで釈門に樞樞在り、仏家に棟梁在り。然れども未だ勸状を進らず、上奏に及ばず。汝賤しき身を以て輒く莠言を吐く。其の義余り有り、其の理謂れ無し。

主人の曰く、予少量たりと雖も忝くも大乘を学す。蒼蠅驥尾に附して万里を渡り、碧蘿松頭に懸かりて千尋を延ぶ。弟子、一仏の子と生まれて諸經の王に事ふ。何ぞ仏法の衰微を見て心情の哀惜を起こさざらんや。その上涅槃經に云はく「若し善比丘ありて法を壞る者を見て置いて呵責し駈遣し拳処せずんば、当に知るべし、是の人は仏法の中の怨なり。若し能く駈遣し呵責し拳処せば是我が弟子、眞の聲聞なり」と。余、善比丘の身たらずと雖も「仏法中怨」の責を遁れんが為に唯大綱を撮って粗一端を示す。其の上去ぬる元仁年中に、延曆・興福の兩寺より度々奏聞を経、勅宣御教書を申し下して、法然の選択の印板を大講堂に取り上げ、三世の仏恩を報ぜんが為に之を焼失せ

しめ、法然の墓所に於ては感神院の犬神人に仰せ付けて破却せしむ。其の門弟隆観・聖光・成覚・薩生等は遠国に配流せられ、其の後未だ御勸気を許されず。豈未だ勸状を進らせずと云はんや。

客則ち和らぎて曰く、經を下し僧を謗すること一人には論じ難し。然れども大乘經六百三十七部・二千八百八十三卷、並びに一切の諸仏菩薩及び諸の世天等を以て、捨閉閣抛の四字に載す。其の詞勿論なり、其の文顕然なり。此の瑕瑾を守りて其の誹謗を成せども、迷ふて言ふか、覺りて語るか。賢愚弁たず、是非定め難し。但し災難の起こりは選択に因るの由、盛んに其の詞を増し、彌其の旨を談ず。所詮天下泰平国土安穩は君臣の樂ふ所、土民の思ふ所なり。夫国は法に依って昌え、法は人に因って貴し。国亡び人滅せば仏を誰か崇むべき、法を誰か信ずべきや。先ず国家を祈りて須く佛法を立つべし。若し災を消し難を止むるの術有らば聞かんと欲す。

主人の曰く、余は是頑愚にして敢へて賢を存せず。唯經文に就いて聊所存を述べん。抑治術の旨、内外の間、其の文幾多ぞや。具に挙ぐべきこと難し。但し仏道に入りて数愚案を廻らすに、謗法の人を禁めて正道の侶を重んぜば、國中安穩にして天下泰平ならん。

即ち涅槃經に云はく「仏の言はく、唯一人を除きて余の一切に施さば皆讚歎すべし。純陀問うて言はく、云何なるをか名づけて唯除一人と為す。仏の言はく、此の經の中に説く所の如きは破戒なり。純陀復言はく、我今未だ解せず、唯願はくは之を説きたまへ。仏純陀に語りて言はく、破戒とは謂はく一闍提なり。其の余の在所一切に布施するは皆讚歎すべし、大果報を獲ん。純陀復問ひたてまつる。一闍提とは其の義如何。仏の言はく、純陀、若し比丘及び比丘尼・優婆塞・優婆夷有りて麤惡の言を發し、正法を誹謗せん。是の重業を造りて永く改悔せず、心に懺悔無からん。是くの如き等の人を名づけて一闍提の道に趣向すと為す。若し四重を犯し五逆罪を作り、自ら定めて是くの如き重事を犯すと知れども、而も心に初めより怖畏・懺悔無く、肯へて発露せず。彼の正法に於て永く護惜建立の心無く、毀皆輕賤して言に過咎多からん。是くの如き等の人を亦一闍提の道に趣向すと名づく。唯此くの如き一闍提の輩を除きて其の余に施さば一切讚歎すべし」と。

又云はく「我往昔を念ふに、閻浮提に於て大国の王と作れり。名を仙予と曰ひき。大乘經典を愛念し敬重し、其の心純善にして麤惡嫉恚有ること無し。善男子、我爾の時に於て心に大乘を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞き、聞き已はって即時に其の命根を絶つ。善男子、是の因縁を以て是より已來地獄に墮せず」と。又云はく「如來昔國王と為りて菩薩道を行ぜし時、爾所の婆羅門の命を断絶す」と。又云はく「殺に三つ有り、謂はく下中上なり。下とは蟻子乃至一切の畜生なり。唯菩薩の示現生の者を



除く。下殺の因縁を以て地獄・畜生・餓鬼に墮して具に下の苦を受く。何を以ての故に。是の諸の畜生に微かの善根有り、是の故に殺す者は具に罪報を受く。中殺とは凡夫の人より阿那含に至るまで是を名づけて中と為す。是の業因を以て地獄・畜生・餓鬼に墮して具に中の苦を受く。上殺とは父母乃至阿羅漢・辟支仏・畢定の菩薩なり。阿鼻大地獄の中に墮す。善男子、若し能く一闍提を殺すこと有らん者は則ち此の三種の殺の中に墮せず。善男子、彼の諸の婆羅門等は一切皆は一闍提なり」已上。

仁王經に云はく「仏波斯匿王に告げたまはく、是の故に諸の国王に付嘱して比丘・比丘尼に付嘱せず。何を以ての故に。王のごとき威力無ければなり」已上。

涅槃經に云はく「今無上の正法を以て諸王・大臣・宰相及び四部の衆に付嘱す。正法を毀る者をば大臣四部の衆、当に苦治すべし」と。又云はく「仏の言はく、迦葉能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得たり。善男子、正法を護持せん者は五戒を受けず、威儀を修せずして、心に刀劍・弓箭・鉾槊を持すべし」と。又云はく「若し五戒を受持せん者有らば名づけて大乘の人と為すことを得ざるなり。五戒を受けざれども正法を護るを為て、乃ち大乘と名づく。正法を護る者は、当に刀劍器仗を執持すべし。刀杖を持つと雖も、我是等を説きて、名づけて持戒と曰はん」と。又云はく「善男子、過去の世に此の拘尸那城に於て仏の世に出でたまふこと有りき。歡喜増益如来と号したてまつる。仏涅槃の後、正法世に住すること無量億歳なり。余の四十年佛法の末、爾の時に一の持戒の比丘有り、名を覺徳と曰ふ。爾の時に多く破戒の比丘有り。是の説を作すを聞き皆悪心を生じ、刀杖を執持して是の法師を逼む。是の時の国王の名を有徳と曰ふ。是の事を聞き已はって、護法の為の故に、即便説法者の所に往至して、是の破戒の諸の悪比丘と極めて共に戦闘す。爾の時に説法者厄害を免るゝことを得たり。王爾の時に於て身に刀劍箭槊の瘡を被り、体に完き処は芥子の如き許りも無し。爾の時に覺徳、尋いで王を讃めて言はく、善きかな善きかな、王今眞に是正法を護る者なり。当來の世に此の身当に無量の法器と為るべし。王是の時に於て法を聞くことを得已はって心大いに歡喜し、尋いで即ち命終して阿闍仏の国に生ず。而も彼の仏の為に第一の弟子と作る。其の王の將從・人民・眷屬の戦闘すること有りし者、歡喜すること有りし者、一切菩提の心を退せず、命終して悉く阿闍仏の国に生ず。覺徳比丘却って後壽終はりて亦阿闍仏の国に往生することを得て、而も彼の仏の為に声聞衆の中の第二の弟子と作る。若し正法尽きんと欲すること有らん時、当に是くの如く受持し擁護すべし。迦葉、爾の時の王とは則ち我が身是なり。説法の比丘は迦葉仏是なり。迦葉、正法を護る者は是くの如き等の無量の果報を得ん。是の因縁を以て、我今日に於て種々の相を得て以て自ら莊嚴し、法身不可壞の身を成ず。仏、迦葉菩薩に告げたまはく、是の故に護法の優婆塞等は、心に刀杖を執持して擁護すること

是くの如くなるべし。善男子、我涅槃の後、濁悪の世に国土荒乱し、互ひに相抄掠し、人民飢餓せん。爾の時に多く飢餓の爲の故に発心出家するもの有らん。是くの如きの人を名づけて禿人と爲す。是の禿人の輩、正法を護持するを見て、駆逐して出ださしめ、若しくは殺し若しくは害せん。是の故に我今持戒の人諸の白衣の刀杖を持つ者に依って、以て伴侶と爲すことを聴す。刀杖を持つと雖も我是等を説きて名づけて持戒と曰はん。刀杖を持つと雖も、命を断ずべからず」と。法華經に云はく「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば即ち一切世間の仏種を断ぜん。乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」已上。

夫經文顯然なり。私の詞何ぞ加へん。凡そ法華經の如くんば、大乘經典を謗する者は無量の五逆に勝れたり。故に阿鼻大城に墮して永く出づる期無けん。涅槃經の如くんば、設ひ五逆の供を許すとも謗法の施を許さず。蟻子を殺す者は必ず三惡道に落つ。謗法を禁むる者は定めて不退の位に登る。所謂覺徳とは是迦葉仏なり。有徳とは則ち釈迦文なり。法華・涅槃の經教は一代五時の肝心なり。其の禁め實に重し、誰か帰仰せざらんや。而るに謗法の族、正道を忘るゝの人、剩へ法然の選択に依って彌愚癡の盲瞽を増す。是を以て或は彼の遺体を忍びて木画の像に露はし、或は其の妄説を信じて莠言を模に彫り、之を海内に弘め之を塚外に翫ぶ。仰ぐ所は則ち其の家風、施す所は則ち其の門弟なり。然る間、或は釈迦の手の指を切りて弥陀の印相に結び、或は東方如来の鴈宇を改めて西土教主の鷲王を居へ、或は四百余回の如法經を止めて西方浄土の三部經と成し、或は天台大師の講を停めて善導の講と爲す。此くの如きの群類其れ誠に尽くし難し。是破仏に非ずや、是破法に非ずや、是破僧に非ずや。此の邪義は則ち選択に依るなり。嗟呼悲しいかな如来誠諦の禁言に背くこと。哀れなるかな愚侶迷惑の麤語に随ふこと。早く天下の静謐を思はゞ須く国中の謗法を断つべし。

客の曰く、若し謗法の輩を断じ、若し仏禁の違を絶たんには、彼の經文の如く斬罪に行なふべきか。若し然らば殺害相加へ罪業何が爲んや。

則ち大集經に云はく「頭を剃り袈裟を著せば持戒及び毀戒をも、天人彼を供養すべし。則ち爲れ我を供養するなり。是我が子なり。若し彼を搥打すること有れば則ち爲れ我が子を打つなり。若し彼を罵辱せば則ち爲れ我を毀辱するなり」と。料り知んぬ、善惡を論ぜず是非を択ぶこと無く、僧侶たらんに於ては供養を展ぶべし。何ぞ其の子を打辱して忝くも其の父を悲哀せしめん。彼の竹杖の目連尊者を害せしや永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺せしや久しく阿鼻の焰に咽ぶ。先証斯れ明らかなり、後昆最も恐れあり。謗法を誡むるに似て既に禁言を破る。此の事信じ難し、如何が意得んや。

主人の曰く、客明らかに經文を見て猶斯の言を成す。心の及ばざるか、理の通ぜざるか。全く仏子を禁むるに非ず、唯偏に謗法を惡むなり。夫釈迦の以前の仏教は其の

罪を斬ると雖も、能仁の以後の經説は則ち其の施を止む。然れば則ち四海万邦一切の四衆、其の惡に施さずして皆此の善に歸せば、何なる難か並び起こり何なる災か競ひ来たらん。

客則ち席を避け襟を刷ひて曰く、仏教斯れ区にして旨趣窮め難く、不審多端にして理非明らかならず。但し法然聖人の選択現在なり。諸仏・諸經・諸菩薩・諸天等を以て捨閉閣抛と載す。其の文顯然なり。茲に因って聖人国を去り善神所を捨て、天下飢渴し、世上疫病すと。今主人広く經文を引いて明らかに理非を示す。故に妄執既に翻り、耳目数朗らかなり。所詮国土泰平天下安穩は、一人より万民に至るまで好む所なり。早く一闡提の施を止め、永く衆僧尼の供を致し、仏海の白浪を収め、法山の緑林を截らば、世は義農の世と成り国は唐虞の国と為らん。然して後法水の浅深を斟酌し、仏家の棟梁を崇重せん。

主人悦んで曰く、鳩化して鷹と為り、雀変じて蛤と為る。悦ばしいかな、汝蘭室の友に交はりて麻畝の性と成る。誠に其の難を顧みて専ら此の言を信ぜば、風和らぎ浪静かにして不日に豊年ならんのみ。但し人の心は時に随って移り、物の性は境に依って改まる。譬へば猶水中の月の波に動き、陣前の軍の劍に靡くがごとし。汝当座に信ずと雖も後定めて永く忘れん。若し先づ国土を安んじて現当を祈らんと欲せば、速やかに情慮を廻らし恕いで対治を加へよ。所以は何。薬師經の七難の内、五難忽ちに起こり二難猶残れり。所以他国侵逼の難・自界叛逆の難なり。大集經の三災の内、二災早く顕はれ一災未だ起こらず。所以兵革の災なり。金光明經の内、種々の災過一々に起こると雖も、他方の怨賊国内を侵掠する、此の災未だ露はれず、此の難未だ来たらず。仁王經の七難の内、六難今盛んにして一難未だ現ぜず。所以四方の賊来たりて国を侵すの難なり。加之国土乱れん時は先づ鬼神乱る、鬼神乱るゝが故に万民乱ると。今此の文に就いて具に事の情を案ずるに、百鬼早く乱れ万民多く亡ぶ。先難是明らかなり、後災何ぞ疑はん。若し残る所の難惡法の科に依って並び起こり競ひ来たらば其の時何が為んや。帝王は国家を基として天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ。而るに他方の賊来たりて其の国を侵逼し、自界叛逆して其の地を掠領せば、豈驚かざらんや豈騒がざらんや。国を失ひ家を滅せば何れの所にか世を遁れん。汝須く一身の安堵を思はゞ先ず四表の静謐を祈るべきものか。就中人の世に在るや各後生を恐る。是を以て或は邪教を信じ、或は謗法を貴ぶ。各是非に迷ふことを惡むと雖も而も猶佛法に歸することを哀しむ。何ぞ同じく信心の力を以て妄りに邪義の詞を宗めんや。若し執心翻らず、亦曲意猶存せば、早く有為の郷を辞して必ず無間の獄に墮ちなん。所以は何、

大集經に云はく「若し国王有って無量世に於て施戒慧を修すとも、我が法の滅せんを見

て捨て、擁護せずんば、是くの如く種うる所の無量の善根悉く皆滅失し、乃至其の王久しからずして当に重病に遇ひ、寿終の後大地獄に生ずべし。王の如く夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡主・宰官も亦復是くの如くならんと。

仁王經に云く「人仏教を壞らば復孝子無く、六親不和にして天神も祐けず、疾疫悪鬼日に來たりて侵害し、災怪首尾し、連禍縦横し、死して地獄・餓鬼・畜生に入らん。若し出でて人と為らば兵奴の果報ならん。響きの如く影の如く、人の夜書くに火は滅すれども字は存するが如く、三界の果報も亦復是くの如し」と。

法華經第二に云はく「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と。又同第七卷不輕品に云はく「千劫阿鼻地獄に於て大苦惱を受く」と。涅槃經に云はく「善友を遠離し正法を聞かず惡法に住せば、是の因縁の故に沈没して阿鼻地獄に在って受くる所の身形縦横八万四千由延ならん」と。

広く衆經を披きたるに専ら謗法を重んず。悲しいかな、皆正法の門を出でて深く邪法の獄に入る。愚かなるかな各悪教の綱に懸かりて鎮に謗法の綱に纏はる。此の朦霧の迷ひ彼の盛焰の底に沈む。豈愁へざらんや、豈苦しまざらんや。汝早く信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に歸せよ。然れば則ち三界は皆仏国なり、仏国其れ衰へんや。十方は悉く宝土なり、宝土何ぞ壞れんや。国に衰微無く土に破壊無くんば身は是安全にして、心は是禅定ならん。此の詞此の言信ずべく崇むべし。

客の曰く、今生後生誰か慎まざらん誰か和はざらん。此の經文を披きて具に仏語を承るに、誹謗の科至って重く毀法の罪誠に深し。我一仏を信じて諸仏を抛ち、三部經を仰ぎて諸經を聞きしは是私曲の思ひに非ず、則ち先達の詞に随ひしなり。十方の諸人も亦復是くの如くなるべし。今世には性心を勞し來生には阿鼻に墮せんこと文明らかに理詳らかなり疑ふべからず。彌貴公の慈誨を仰ぎ、益愚客の癡心を開き、速やかに對治を廻らして早く泰平を致し、先づ生前を安んじ更に没後を扶けん。唯我が信ずるのみに非ず、又他の誤りをも誠めんのみ。